



「華ひらく皇室文化—明治宮廷を彩る技と美—」展 学習院大学史料館会場の見どころ

国賓をおもてなしする宮中晩餐会、その映像をご覧になったことがある方も多いかと思います。実はこの宮中晩餐会は、明治のごく初期にイギリスから導入された様式を現在までほぼ同じ形で続けている、世界的にも稀有な正餐スタイルなのです。日本の皇室は明治期に受容した西洋文化に日本の伝統文化を取り入れた、独自の近代皇室様式をそのままタイムカプセルのように現在まで守り続けているのです。その様式がどのように出来てきたのか、そこには皇室のどのような思いがあったのかを作品を通じて見ていきたいと思ひます。

明治8年(1875)に宮内省からイギリス・ミントン社へ発注された洋食器には、「御旗御紋」が描かれています(図1)。この時同時に発注された「御旗御紋」付ガラス器は現在でも宮中晩餐会に使用されていますが、このミントン社の製品を模倣して、国産でも「御旗御紋」付のカップ&ソーサーが作られ(図2)、明治の皇室で使用されていました。

この頃、延遼館で使用されていた国産洋食器は歪みもあり、西洋と同じような製品を作ろうとした職人達の苦心が偲べれます(図3・5)。



図1 「金彩御旗御紋食皿」ミントン社製
明治8年(1875)〔個人蔵〕



図2 「色絵金彩御旗御紋瑠璃文コーヒー碗・皿」精磁会社製
明治20年(1887)頃〔個人蔵〕



図3 「色絵金彩人物花鳥文食皿」南里嘉壽製
明治5年(1872)～13年 延遼館備品〔個人蔵〕

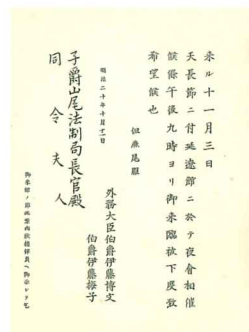


図4 「延遼館天長節夜会招待状」
明治20年(1887)11月3日開催〔当館蔵〕



図5 「色絵金彩花鳥文食皿」幹山伝七製
明治6年(1873)～22年 延遼館備品〔個人蔵〕

延遼館

延遼館は海外からの賓客を接待するために明治2年(1869)7月に現在の浜離宮内に竣工しました。外務省管理の施設として国賓の接待だけでなく、外交会談や条約締結など様々な場々に使用されました。同17年に宮内省へ移管、同23年頃にその役割を終え、取り壊されました。



鹿鳴館

明治16年(1883)、外務卿井上馨によって発案された外賓接待施設として建てられたのが、鹿鳴館です。設計はジョサイア・コンドル。欧化政策の舞台として夜会や舞踏会が繰り広げられましたが、同20年に井上が辞任するとその役割を終え、建物は華族会館に払い下げられました。



右の昭憲皇太后の写真は、明治22年(1889)6月15日に丸木利陽により撮影されたものです。前日に鈴木真一により撮影された立像写真が「御真影」として数多く下賜されたのに対して、座像写真は撮影された記録はあるものの、今まで殆どその存在が確認されていなかった、極めて貴重な写真です。

この写真の皇后はしっかりと前を見据え、力強さを感じられます。またドレスの文様やトレーンの重量感などが鮮明に映し出されているところも見どころです。

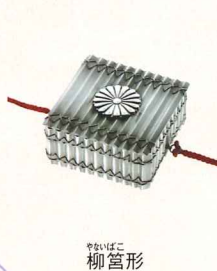
(学習院大学史料館学芸員 長佐古美奈子)



昭憲皇太后 明治22年(1889)6月15日 丸木利陽撮影
〔学習院大学文学部史学科蔵〕



明治20年代より、外賓のおもてなしの後などに配られるようになったボンボニエール。元々はフランス・イタリアの小型菓子器でしたが、日本の伝統技術を駆使した日本皇室独自の文化として発展しました。現在でも皇室のご慶事の際には、製作下賜されています(下図5点はすべて当館蔵)。



柳宮形



檜扇形藤桜文



方形色絵菖文



重ね箱形



和船形

菊花紋吉野山蒔絵料紙硯箱

皇室からのお気持ちを伝える下賜品には、日本の伝統工芸品が多く用いられていました。その1つ、大正天皇より伯爵寺内正毅に贈られた「菊花紋吉野山蒔絵料紙硯箱」(当館蔵)をご紹介します。

これは金粉を密に蒔き付けて飾った料紙箱と硯箱のセットです。箱の外側に吉野山、内側に龍田川と、春秋を代表する歌枕の情景を描いています。文様は、金の高蒔絵に銀蒔を交えて表現されており、樹の幹などは、金の薄板を小さな方形に切った切金とよばれる技法で飾られています。高蒔絵で描かれた文様の輪郭線はきわめてシャープで、遠景にみえる桜樹の蒔絵と好対照をなしています。きわめて巧緻な蒔絵表現で、まさに超絶技巧と言えるでしょう。

宮内庁宮内公文書館所蔵史料には「大正五年七月一四日 御紋付料紙文庫硯箱 但桜二楓模様付 一五〇〇円 伯爵寺内正毅へ下賜」とあり、前年8月に三上治三郎へ発注された品であることがわかります。なお、同じ日に、公爵山形有朋、公爵大山巖へも御紋付料紙硯箱が下賜されています。

三上は京都の漆器商で、多くの博覧会などで受賞歴があります。この作品には制作者銘がありませんが、京都の漆芸家戸島光季の作である可能性があります。泉屋博古館分館では戸島光季の「枝垂桜蒔絵手箱」が出品されますので、是非両会場で見比べていただきたいと思います。

(学習院大学史料館客員研究員 小松大秀)

